

学術講演会

戦争で分断された人生：その記憶と記録*

Harumi BEFU**

I. 序

戦争で分断された家族は無数にあるといっぴよい。「中国残留孤児」という名で呼ばれてきた、中国東北（満州）開拓団員などの家族がまず念頭に浮かぶだろう。第二次大戦中ヨーロッパでも戦争のために分断された家族はユダヤ系家族をはじめとして数多くあった。本稿の試みは太平洋戦争を体験した「個人」ないし「家族」という個体の変転とその戦争時代のマスター・ナラティヴがどのように関係しているかを検討することが焦点である。個々の個人、家族の変転の集積がそのまま一時代のナラティヴなのか、そうでなければそのどの部分が時代の流れを表すマスター・ナラティヴとかみ合っているのか、どの部分はかみ合っていないのか、関係が無いのか。つまり戦争という大きな歴史の流れの中で個々の個人、家族の出来事をどのように見ればいいのか。これが本稿の着眼点である¹⁾。

本題に入る前に方法論的問題として取りあげるべきことがある。個人的な過去を述べるに当たってその資料として個人の記憶と記録（日記、書簡など）があるが、その資料としての有効性が議論の対象にならざるを得ない。一般に「個人史」、「自分史」または「パーソナル・ナラティヴ」などといわれているジャンルでは記憶を過去の事実

と容易に受け取っている場合が多い。

歴史の記述上、記憶の信憑性の重要性は自明である。基本的に記憶は現在の時点で「自己」を正当化する「道具」ないし「手段」であるという立場を著者はとっている。記憶というのは過去をそのまま再現しているものではない。記憶は過去の正確な再現であると思うのがごく普通の、ナイーブな考え方だろう。しかし過去の事実は思い出す過程で都合の悪い部分は忘却されたり、削除されたり、一部は誇張され、粉飾され、場合によっては無実を創造して、自分の「過去」に組み込んでいくことさえある。「本当にあった過去（それが何ものなのかは分からないが）」とその「過去」から編集されている「過去」との関係は非常に複雑である。本稿では、そのつくられた、編集された過去を披瀝していくことになる。ということは、本稿が著者自身の立場をどのように正当化しているかという問題でもある。

II. マスター・ナラティヴ

仮に学校の教科書で習う歴史をマスター・ナラティヴとしよう。この扱いにはいろいろと問題があることに当然気がつくだろう。教科書によってナラティヴが異なるのは当然である。また文部科学省の検定などの理由で教科書になり得ない歴史書もある。そのどれをとってマスター・ナラティ

*キーワード：戦争、マスター・ナラティヴ、日系アメリカ人

**米国・スタンフォード大学名誉教授

- 1) 太平洋戦争で日本とアメリカに分断された家族は数多くある。袖井林二郎は1929年現在で日本に在住する日系二世は約3万人としている（『わたし達は敵だったのか—在米被爆者の黙示録』（同時代ライブラリー232）岩波書店、1995年）。これは日米戦争の始まる11年前の数字で、1941年の数字とは直ちに受け取られないが、おそらくこの数字は大きくは変わっていないと見てよかろう。また、その全員が分裂された日系家族を表しているを受け取るのも危険であるが、分裂された日系家族の数が10や20のような少数ではないことは察しられるだろう。袖井は事実、分断された家族の例をこの本にあげている（12-33ページ）。

ヴと称すればよいのか。どれを選択するかによってナラティブは大幅に違ってくる。しかし、ここではこの問題は一応据え置き、大雑把に「常識」ないし「集合意識」として受け入れられている歴史のナラティブを「個人史」と対応させ、その違いを認識する作業にとどめたい。

この、ナラティブの対象となる集合体は、日本国家であり、アメリカ合衆国であり、双方が戦う戦争をどのように理解するか、したかということが本稿でのナラティブである。当然日本とアメリカとは日米戦争に対する認識が異なる。ここでまた、「どの歴史」を選択するかという問題に直面せざるをえない。「日本史」にしる「米国史」にしる数多くあり、どれをマスター・ナラティブとするかによって分析が異なってくることは明らかである。本論ではこの問題は操作的に扱っていききたい。つまり個人の、ないし家族のナラティブを、その個人の立場、家族の立場を「集合体の歴史」(マスター・ナラティブ)に重ねた場合に何が見られるのかということの問題にしたい。

幾万とある個々の個人史を蓄積していったものがマスター・ナラティブなのか、あるいはマスター・ナラティブと個人史は別々のもので矛盾することもあるのか、してもいいのだろうか。あるいはその関係は「無関係」なのか。このようにいろいろな関係があると思う。個人史がマスター・ナラティブを忠実に反映したものなら、太平洋戦争を始めた日本国家が「一億国民総動員」の号令をかけ、国民は国家のために命を投げ出して尽くしたことになる。しかし一億総動員の号令に屈しなかった「個人」はこのマスター・ナラティブではどう扱えばよいのだろうか。そういった問題点をこれから拾っていききたい。

Ⅲ. 資料

本稿の資料としては、一つには登場人物(主人公やその親、兄弟など)の記憶がある。記憶の信憑性についてはすでに言及した。一部は、テープレコーダーで、30年ぐらい前から機会のある度に聞きとり、50本ほどとってある。これは「記憶の記録」であって、先述の「記憶の信憑性」の問題がかかわってくることは認めなければならない。

また戦争中に登場人物の一部がアメリカで収容所に入っていたので、かれらの収容所の公的記録が国立資料館に保管されている。これは当人、あるいは当人が死亡している場合は、家族の者が収容所入所時に渡された個人番号で申し込めばその記録を請求することができる。当該家族の場合は入院の記録、出産のカルテ、それから終戦後、出所したときの手続きの記録などが残っている。

本論の主人公、海野春夫の母は、自分宛の手紙を全部保存していた。ただし戦前の手紙は残念ながら収容所への入所以前に破棄されていて全くない。というのは、戦争勃発と同時に日本人、日系人に対する監視が厳しくなり、日本人社会で、日本人会、その他の種々の団体の役員など、役職についていたものはFBIや警察に連行され尋問に遭い、逮捕されることも多くあった。そのため当時は不利になる証拠物件、例えば「軍艦マーチ」などの愛国的なレコードや本などを隠滅、焼却することが常習手段になった。春夫の母もそのため戦前の書類はほとんど処分したらしい。

戦後の資料としては、春夫の母のところへ届いた手紙が約400通残っている。そのほとんどが兄弟、親類、あるいは子供から来たものである。当然ながら母親の出した手紙は母親の手元には残っていない。戦前からの写真は残っているので、戦前の事情の聞き取りの場合には写真は過去を引き出す手段として非常に便利だった。春夫の父は無口で自主的に話をするのはあまりなく、話しかけても一言二言話すだけで、インフォーマントとしてはあまり役に立たなかった。

Ⅳ. 戦前

(本稿に登場する人物名はすべて匿名であることをここで明記しておきたい。)[長男は家の跡を継ぐので移民には行かない、次男・三男が移民に行く]、という言い習わしが移民史のマスター・ナラティブになっている。しかし、本稿の主人公、海野春夫の父、國男の場合は本家の長男だったのにもかかわらず、海外へ出た。それは第二人の教育費を稼ぐためで、その結果、第二人とも当時の高等商業学校を卒業することができた。

移民をしたのは、1910年で、そのころアメリカ

ですすでに排日の機運が高く、排日、反日の法律さえできていた。例えば、日本人の帰化は許されず、帰化不可能の移民は土地所有が禁止されていた。そのような法律で日本人を締め出そうとしていた。このような排日の背景があり、春夫の父、國男はアメリカ合衆国への直接移民をあきらめ、まずメキシコに渡った。メキシコ北部の鉱山で働いていたが、過酷な労働条件に耐えられず、日本からの同郷人とメキシコからテキサスに越境し、テキサスからカリフォルニアに移り、小作農業を始めたが、後には庭園師で生活を立てた。

1921年に日本に帰り、見合い結婚をした。その背景にはアメリカにおける日本人に対する移民禁止法があった。ただし、すでにアメリカに在住している日本人移民の在日の妻、家族を呼び寄せることはできた。いわゆる写真結婚は法律のこの「但し書き」の網の目をくぐって、日本に帰らずに、日本から送られた写真の相手と結婚手続きを日本の役場で済ませ、その妻を呼び寄せるという移民の知恵から生まれた制度だった。だが、國男はあえて日本に帰り、妻のとみを連れてきた。とみは一船遅れて渡米し、夫、國男とサンフランシスコで合流した。そのとき、とみはすでに長男を身ごもっていた。

妻のとみは東京の建築会社社長の家で若奥様付きの女中をしていたが、一年ほどで暇をとり國男と結婚することになる。海野夫妻は1921年、1922年、1924年、1927年、1930年にいずれも男子をもうけた。長男のタモツの場合、誕生以来会話は両親ないし両親の（日本人の）友人にほとんど限られていたので幼稚園に上がるまで英語を習得しなかった。幼稚園で英語が分からず苦勞をしたという。タモツの四人の弟の場合には事情が変わっていた。第四人は順次兄や、兄の友達などから英語を習得し、兄弟間では英語のみで話した。しかし親および親の世代の日本人とは拙い日本語で話した。一世とは日本語で、二世間では英語で、というパターンは日本人・日系人社会では一般的だった。二世の日本語のレベルは英語のそれにおよばず、英語を交えた独特の日本語を形成していた。兄弟間では英語ばかりで、日本語が上達しないの

で母親は心配し、夕食のときだけは英語を禁止し、日本語だけで話すよう「お達し」を出した。ところがそれ以来五人兄弟は黙々と沈黙して食事をし、母親のもくろみは達せられなかった。

当時、一方では白人社会からの有色人種、特に日系人に対する種々の偏見、排斥が強く、白人社会へ入っていく可能性はほとんど皆無とってよかった。他方日系移民の英語力のレベルが一般に低く、そのためにも日系人以外との文化的、社会的交流がほとんどなかった。そういったことを受けて、日系人社会の凝集度は非常に高かった。日本人会、県人会、日本語学校、また日系人のための種々の宗派のキリスト教教会、各宗派の仏教「教会」もあり、そのほか、一世の先生の指導のもとに柔道、剣道などの道場に若い二世達は通い、これらは日系人交流の場となっていた。このようにして、収入を目的とした経済活動以外には日系人は日本人社会の中で生活をし、そこから外に出るといことはほとんどなかった。この日系人社会は日系人に対する排斥というマスター・ナラティブと同時に、アメリカ社会への不適応によっても形成されたといえる。英語が不得手であるため、日本人だけで集まるといことが自然にあり、さらに凝集度を高めるものとして外部排斥があった。日米関係が悪化するにつれ、それに対する反作用として日本への愛国心も当然非常に強くなり、種々の団体が日本軍への寄附金を募ることもよくあった²⁾。

主人公の五男である春夫は、子供のころは外部からの差別、白人からの差別を受けたという記憶はない。一つには生活がほとんど日系社会のなかに限られていて、差別を受ける機会が少なかったということもあるだろう。幼稚園や学校で差別があったという記憶は無いが、春夫は六才の時に日本へ行くことになり、学校経験が比較的短かったこともその理由の一つだろう。

1936年、春夫が六才のときに母親が三男のジョージ、四男のマナブ、と五男の春夫の三人を連れて日本に行くことになる。子供の立場からは、一体どういう理由で日本に行くことになったのか全くわからなかった。ただし、それは非常に

2) 木村健二「徴兵忌避と軍資金献納」移民研究会編『戦争と日本人移民』東洋書林、1997年、20-32頁。

特別なことであった。というのは、アメリカを出発する前に、家族一同、正装して、春夫は上下ビロードの服を着て、日本町の写真館で写した写真がある。後でわかったことだが、渡日の理由は母親が三男のジョージを、父、國男の弟、小嶋光三の家の養子にするために連れて行くということであった。光三は子供に恵まれず、光三の兄、國男は息子の1人を養子に与える約束をしていた。このような形の養子縁組は当時の日本社会の慣習としてはごく普通のこと、驚くに足りないことだったが、アメリカ社会の文脈で育った少年にとってこれは不可解なことだっただろう。いかに「閉ざされた」日本人社会で育ったとはいえ、日本の親族制度をそのまま踏襲することが通らないアメリカ文化の中でのことだった。(これは一世である親が二世に見合結婚を強いようとして、ほとんどの場合失敗したことで分かる。)

母親のとみとしては四男のマナブと五男の春夫はアメリカに連れて帰るつもりだったが、結果として、春夫は五男のジョージが養子に行った先の、大阪市の小嶋光三宅に預けられることになる。四男のマナブは堺市在住の、國男のもう一人の弟、小嶋直宅に預けられた。このようにして1936年から戦後まで家族は堺、大阪、アメリカと分かれてしまった。

アメリカから来た当初は、兄弟三人は当然英語で話し合っていたし、衣服もアメリカのものを着て、髪もアメリカ風に長く伸ばしていた。このような行動パターンを見た近所の子供は海野兄弟を「スパイ」呼ばわりをし、また「合いの子」と呼んだ。「合いの子」という表現は「混血児」を指し、海野兄弟は混血児ではないのでこの表現は該当しないのだが、あえて「混血児」と呼ぶところに潜む二つの重要な意味合いがある。一つは、単に外国の「文化」を持っているだけで白人の「血」を持っているがごとくに思う考え方である。つまり生物学的思考と文化的発想とを混同していることである。第二に、「混血」は「純血」に劣るという思想が当時の日本社会を風靡していた。それを子供たちも自分たちの文化の一部として内面化していたことである。そのような蔑視、偏見、差別を避けるため海野兄弟は長髪を切って日本人の子供のように丸坊主にし、アメリカ製の衣

服を棄てて日本製の衣服に着替え、英語は家の外では絶対話さないようにし、なるだけ早く日本人の行動パターンに同調するように努力した。

海野兄弟を「スパイ」や「合いの子」呼ばわりをする「いじめ」の背後には、すでに戦前、日本は日本民族という単一民族の国家であり、その日本民族ための国家であるというマスター・ナラティヴが子供にまで浸透していたと考えていいのではないだろうか。日本単一民族主義は戦後に出てきたという議論もあるが、このような体験から考えれば、戦時中、あるいは戦前からすでに日本単一民族主義があったといつてよからう。つまり日本のマスター・ナラティヴとして、日本国家は、同質文化、単一民族であるという考え方が、庶民のレベル、子供のレベルにもすでに浸透していたのではないだろうか。

日本に到着して三か月ほどして三人兄弟の母親がいつの日にかいなくなった。これは青天の霹靂の事件だったに違いない。三人の子供の知らない間になくなったのだ。春夫には母との別離の場の記憶は全くない。六才の子供にとって親がいなくなるということは忘れられない体験のはずだ。そのつらい体験の処理法として一つには、その記憶を自己のアイデンティティ、ひいては「自分史」構築の基礎として、その後の自分の性格や履歴をこの事件で説明することが考えられる。むしろこの方法が常套手段だろう。その場合にはそのつらさを処理するためのセラピーのような心理療法が履歴に加えられることとなろう。もう一つの、春夫の取った手段は無意識かもしれないが、その事件そのものを記憶から抹殺することによってつらさも抹殺してしまうことであった。

そのときの別離の事情を知ったのは11年後、春夫がアメリカに帰ったとき、母親から直接に知らされた時だった。母親にとっても子ども三人を置いてアメリカに帰えるのは身を切るよりつらいことだったに違いない。子どもを目の前において別れを告げるのは忍びないつらさを経験しなければならぬことになる。そのつらさを避けるために母はわが子のいない間に小嶋光三家を去り、神戸港から船に乗って帰った。母親の言葉を借りれば、「逃げるようにして」日本を去った。

三男のジョージは、叔父の家に養子として入籍

し、法的にも名前を「小嶋正治」と変えた。叔父自身、養子として小嶋家に入籍していたので、兄、國男の海野姓は名乗っていなかった。そのためジョージも小嶋姓を名乗ることになった。下の名も、叔父は「正治」に変えて入籍した。当時日本では下の名を変えることは珍しくなかったので名前を「正治」と変えたことは日本の慣習上は別に奇異ではなかったが、アメリカの日系社会では養子縁組や改名はほとんどなかったし、アメリカ文化の中で育ったジョージにとっては自分の名前を全く変えられることには、日本の戸籍に入籍するよりも強い抵抗があったに違いない。入籍は大人が勝手にしたことで子供は直接には関与していないが、名前が変わることはその日から身をもって体験することである。ジョージ・ウンノは名義上「小嶋正治」という全くの別人になってしまった。(ここからはジョージが直面した社会心理的な現実を伝えるために「小嶋正治」の名称を使うことにする。)

マナブの場合は、叔父の海野家に預けられたこともあり、引き続きウンノの姓とマナブの名を使った。ただし、名前は日本の慣習に従い漢字で「海野学」と表記することになる。

五男の春夫の場合は法的には名前を変えなかったが、小学校(のちの国民学校)に通っている間、叔父は「小嶋秋夫」という通名を使わせ、小学校にもこの名前前で登録し、先生からも「小嶋秋夫」とよばれ、級友も春夫・ウンノなる「小嶋秋夫」が叔父の実子であると思っていた。かくして春夫・ウンノも名義上は「小嶋秋夫」という全くの別人になってしまった。小学校在学中に叔父は春夫にも「海野春夫」という漢字で日本の戸籍をつくり、れっきとした「日本人」にしてしまった。そのため中学校に上がったときには通名は使えず、「海野春夫」で登録した。しかし自宅では叔父は11年間春夫を「秋夫」と呼んだ。

このように名義を変えてしまった意図には、「小嶋正治」と「海野春夫」の二人を、戸籍上はともあれ、実質的には自分の子供として育てたいという叔父の願望があった。そのため叔父はジョージと春夫の親に文通をやめるよう指示し、自分を「お父さん」、自分の妻を「お母さん」と呼ぶように、と二人に言い渡した。だが二人とも

11年間それをかたくなに拒否した。二人は叔父と同じ屋根の下に11年間住みながら叔父を一度も「お父さん」と直接に呼んだことがなかった。とって「叔父さん」と呼ぶことも出来なかった。叔母は三年後に亡くなり、叔父は再婚したが、この二人の叔母に対しても「お母さん」という呼称はただ一度も使わなかった。これはマスター・ナラティヴと関係はないかもしれないが、春夫個人としては自己のアイデンティティの構成、維持のうでで決定的な事実であり、忘れ得ぬ経験だった。

1941年、太平洋戦争が始まる五か月前の7月7日に、三兄弟の父、國男がアメリカから来訪した。当時の意識では、四年前に「盧溝橋事件」の結果「支那事変」が勃発した、記念すべき日だったことを春夫は覚えている。その日から約四か月、國男は日本に滞在した。その間國男は自分の二人の弟、小嶋光三と海野直のところに滞在したり、あるいは故郷に墓参りに行き、分家の家に居候したりした。その間兄弟三人が父親と同居し、家族のような形で一家団欒の生活を営むことは一度もなかった。國男は訪問に来たにすぎなかった。

その間、父は日本の秘密警察である特別高等警察につけ狙われていたことは特記すべきだろう。日米間の風雲険しい中、特別高等警察は父をアメリカのスパイと想定していたらしい。そして真珠湾攻撃の約一か月前、これが最後のアメリカ行きになるだろうといわれた船で國男はあたふたと帰国した。

V. 戦争

1. 日本の兄弟

日本時間の1941年12月8日、第二次大戦、ないしは「大東亜戦争」が始まった。小学校の校庭での朝礼で校長が真珠湾攻撃と連合国への宣戦布告について生徒に話したことを秋夫はよく覚えている。何か緊迫した事態が起こったことは感じたがそれ以上のことは小学生の秋夫にはよくわからなかった。ましてやこれが敗戦に結びつくとは思ってもよらなかった。「支那事変」中、軍部の戦勝の偽報に酔っていた国民は「大東亜戦争」をその延

長戦の上で考えていたのだろう。

当時「第二次世界大戦」という表現は一般に使われず、もっぱら「大東亜戦争」と表現された。それは「大東亜共栄圏」を築くための「聖戦」であるとされ、「国民総動員」、「鬼畜米英」、「撃ちてしまぬ」などのスローガンが新聞の一面を飾り、市街の大型看板を塗りつぶして、日本は徐々に戦争一色になりつつあった。「鬼畜米英」の「米」が自分の生まれた国を指していることも秋夫には別に気にならなかった。1941年には小学校は「国民学校」に代わり教科内容も戦時色に塗りつぶされていった。秋夫が小学生の五年の12月に始まった戦争は、中学に入って戦火を増し、政府は中学生といえども「一億総動員」の一員であることは片時も忘れさせなかった。それは軍事教練であり、朝礼時の「皇居遥拝」、つまり神化された天皇崇拜であり、次々と召集されていなくなる先生であり、軍需工場へ徴集される会社員であり、農村の田植え、稲刈りへの奉仕であった。そして、そこに小学生のときから疑問一つ持たず「南京陥落」を祝う提灯行列に加わり、ことあるごとに「天皇陛下万歳」を叫び、「教育勅語」を暗記し、愛国心、軍国主義を素直に受け入れていく秋夫があった。

三兄弟の親たちに関するニュースが戦時中偶然入ってきた。それは開戦まもなく、1942年に組織された日米交換船によって伝えられた。交換船については『日米交換船』（鶴見俊輔・加藤典洋・黒川創共著、新潮社刊、2006年）に詳しい。交換船の意図は、日本およびアジア諸国に戦前から在住し戦争のために帰国不可能になったアメリカ人、その他の連合国人をアメリカへ帰し、同時に南北米在住の日本人を日本に帰すことだった。日米交換船は二回企画され、イギリスからも交換船が一回出た。イギリスからの第二回交換船は戦争激化のため中止となった。交換船の目的は政府高官、経済界要人などを敵国から自国へ帰すことだった。第一回の交換船には鶴見俊輔とその姉、和子が乗っていた。マスター・ナラティヴには、鶴見俊輔のような著名な人物しか出てこない。しかし事実はそうではなかった。

戦争中ある日、突然私たちのところに、交換船で帰ってきたという人が小嶋家へ訪ねてきた。そ

の人は海野兄弟の両親と同様、コロラド州アマチ収容所に入れられていた一移民にすぎなかった。どうして一移民が交換船で政府高官、経済界要人と同じくして帰ってきたのか定かではない。その人が収容所の状態を説明し、海野兄弟としては初めて自分の親たちが収容所にいることを知り、また母親が妊娠しているということもそのときに知らされた。

アメリカの家族の安否については、この交換船による帰還者からの情報以外にはただ一回だけ、スイスのジュネーブの赤十字社を通じて両親から往復葉書がとどいた。その葉書にはただ、両親たちが無事であるということが書いてあるだけだった。復信書にこちら兄弟が無事であることを書いて出したが、それが受領されたかどうかは知らない。

戦時体制の中で各学校は敵国の言葉である英語の時間をどんどん減らしていた。中には全くなくなった学校もあった。その中で春夫の中学校の校長は戦争に勝つために敵国の言葉を知る重要性を強調し、かたくなに英語の時間を維持し減らすことはしなかった。中学二年のとき春夫の中学校の修身の先生が徴兵され、校長が代わりに教えることになった。校長は修身の代わりに英語を教えた。ある日校長は1944年のルーズベルトの選挙演説のプリントを配布して生徒に読ませた。そのプリントは「川を渡っているさなかに馬を乗り換えるな」という、有名な演説だった。つまり戦争の真っ只中にリーダーを変えるな、という意味である。それを読み終わって、校長は連合国ではリーダーが皆戦争の勃発以来変わっていないことを指摘し、日本の総理大臣が次々と変わってきたことを非難した。この趣旨は祝日に学校全員が講堂に集まったときにも堂々と説いたが、警察に逮捕されることもなかったのは、思想統制をテーマとする戦時中のマスター・ナラティヴでは考えられないことだった。

春夫が中学校に入ると「軍事教練」の科目があり、専属の下士官が担当となり、戦争の逼迫さ、間近さを一段と感じた。春夫は登山部に属していたが、間もなく「登山部」の名前は戦時期にふさわしくない、という理由で「行軍部」に名前が変わった。といっても活動の内容には変わりなく、

二週間に一回は登山をした。1944年、春夫の所属する中学二年は、農村に動員され農家に泊り込みで手伝いをした。また1945年には和歌山県に動員され山の中にトンネルを掘った。アメリカ軍が和歌山県に上陸することを想定し、トンネル網を掘って軍備品などを備蓄して米軍上陸に備えたのだ。

中学三年になると春夫の学級全員が海軍の軍需工場に動員された。工場はB29の爆撃に何度か見舞われた。工場を破壊するために、焼夷弾ではなくTNTの、爆発する爆弾をB29から落とす。空襲の時には工場長などの役員は防空壕に逃げ込んだが、動員された生徒のための防空壕はなく、淀川の河原に避難をした。誘導に当たった海軍の下士官は、生徒に間隔を充分あけて伏せる指示をした。その理由は、全員が固まっていれば一発の爆弾で全員死ぬ、広範囲に散らばっていれば、数人死ぬ可能性は高いが全員死ぬ可能性は低い。国のためには、天皇陛下のためには、全員一度に死ぬことは避けなければならないのだった。この説明に疑問ももたず生徒は下士官の指揮に従った。春夫は空襲、爆撃で級友を失い、重症の級友を阿鼻叫喚の病院に運び、そこでも重傷者の死を目の当たりにした。この空襲後、爆撃を恐れて多くの生徒は工場に来なくなったが、春夫は8月15日「終戦」になるまで工場に通った。

8月6日には広島での原子爆弾投下があったが、新聞はそれを「新型爆弾」としか発表せず、被害は「微小」と報告された。その翌日か翌々日、例のごとく空襲警報で避難をしているとB29からビラが舞い降りてきた。それには広島に投下された爆弾は原子爆弾で甚大な被害を与えたこと、そしてアメリカには同じような原子爆弾がまだいくつもあり日本に投下する用意があることを伝え、天皇陛下に戦争を直ちに止めることを伝えるように書いてあった。そのビラは取っておきたかったが、所持していることが警察ないし軍部に発覚すれば危険なので春夫はビラを直ぐ棄てた。

軍需工場へ動員中、春夫はとある小学校に集合するよう陸軍から召喚を受けた。その小学校で同年輩の多くの中学生とともに軍医の簡単な身体検査を受けた。そして全員合格を宣言され、直ちにその場で陸軍に志願するよう言われた。印鑑は必

要とせず、拇印でいいとされた。生徒の集合した部屋の出口に下士官兵が立ち、志願書を提出した者から帰らせた。春夫は海軍経理学校へ志願中であるという（実は真っ赤な嘘の）口実で志願を逃れた。

四男の学（マナブ）は1944年に海軍兵学校に志願したがまだ在学中に戦争が終わった。もし卒業していたら恐らく命はなかっただろうと学もいつている。学によると当時、海軍兵学校の卒業生には三つの選択肢があった。第一希望は航空兵になることだった。つまり特攻隊に入るということで、特攻隊に入れば必ず死ぬと思わなければならなかった。その次は潜水艦に乗り込むことである。潜水艦も本当の潜水艦ではなくて、爆弾を搭載し、敵艦に体当たりをする潜水艦で、この場合にも死ぬことは確実だった。第三番目は陸上隊員で、この場合は必ずしも死ぬということはないが、当時の海軍兵学校の空気としては、この第三番目の選択が一番望まれなかった選択肢だった。戦争が長引いていけば、学はゼロ戦か潜水艦に乗って「お国のために」、「天皇陛下のために」死んでいただろう。この第一、第二希望は上から押し付けられたものだったのか、あるいは生徒自身の真摯な希望だったのかは定かでない。戦後のマスター・ナラティヴは「おしつけ」論をとる。それは戦時中のイデオロギーを否定する姿勢からきていることであって、必ずしも実証性はない。

養子になったジョージ、つまり小嶋正治は、徴兵を避けるために徴兵免除だった師範学校に入った。しかし戦争の悪化とともに師範学校も徴兵適用となり、正治も徴兵されたが、海外へ派遣されることもなく、また当然国内で米軍を迎え撃つこともなく「終戦」を迎えることになる。

2. アメリカの家族

翻って、アメリカに居残った海野家はどうかだろうか。周知のように、太平洋戦争勃発直後、それ以前からの在米日系人に対する排斥運動がさらに拍車を掛けて全米に広がり、翌年にはルーズベルト大統領令9066が發布され、太平洋沿岸に在住する日系人は国籍のいかんにかかわらず、(日本国籍の一世もアメリカ国籍の二世も)太平洋岸から立ち退きを命じられた。そのほとん

どがアメリカ西半部に設置された十の収容所に、約一万人ずつ、総人員約十万人の日系人が収容された。劣悪な自然条件の生活不可能とされた砂漠にバラックを建て、そこに日系人を住まわせた。

その体験について、現在の政治的立場（マスター・ナラティヴ）からいえば、その処置を徹底的に批判すべきことになっている。事実、その処置はアメリカの憲法違反であり、人権を蹂躪したことが法廷で立証され、国は謝罪するとともに賠償金を一人につき二万ドル支給した。しかし海野とみは収容所生活をそう一概に悪かったとは思わなかった。「ただで食べさせてもらい、住家を与えられて、三年間の休暇をもらってあんな楽なことはなかった」と証言している。そのような証言は politically incorrect、つまりマスター・ナラティヴを間接的に否定するので政治的に不適切とされる。だが、それまで土曜も日曜も休まず働かなければならなかった移民にとって収容所生活ほど楽なことはなかった。収容所では詩吟、絵画、木工など種々の趣味のクラブをつくり、日々の生活を楽しんだ。とみにとっては、終戦になり収容所生活が終わったのはそういう意味では残念だった。そこに憲法違反を錦の御旗に掲げるマスター・ナラティヴと、個人の体験とに大きな食い違いがある。

収容所生活のもう一つの大きなメリットは、収容所内にいる限り偏見、差別を経験することはなかった。以前は家を出れば四面楚歌の世界で、偏見差別を常に肌を感じながらの生活だった。偏見、差別のため西海岸立退きに会い、有刺鉄線を張り巡らした収容所に入れられた事実是否めないが、収容所内では差別は全くなく、その点安心して生活ができた。

海野國男は大半の一世と同様、この戦争に関しては日本側の正当性を信じて止まなかった。その点アメリカ生まれの、アメリカに忠誠心を誓う長男のタモツとは意見が真っ向から食い違った。タモツの母親のとみにいわせると、毎晩のように父親と長男は口論をしていた。その果て、タモツの証言では約六か月父と一言も交わさなかった。あてがわれたたった一つの部屋で毎日向かい合って無言で一日中過ごす圧迫の空気は想像し難い。兄はその圧迫を逃れるために、またアメリカへの忠

誠を示すために当時、陸軍が編成した442連隊に応募した。父親は志願をするなら帰ってくるな、と勘当を言い渡した。ところが残念ながら兄は身体検査で近眼のため不採用になり、仕方なく収容所に帰ったが、父との関係は修復せず、「無言戦争」が続いた。長男は居たたまれなくなって収容所を出て、東海岸に行き戦争が終わるまで東海岸にいた。マサチューセッツ州立大学で庭園設計学を学び、結局庭園師だった父親の後を追うような学問を専攻した。父は戦前、庭園師をしていたにもかかわらず、イデオロギー上父と真っ二つに分かれた長男が庭園設計を専攻したのは皮肉だったと思わざるを得ない。それともイデオロギー上の葛藤を超える親子の絆があったのだろうか。戦争が日本の敗戦で終結がついたこともあってか、國男は一度勘当をした息子が帰ることに反対はしなかった。タモツは1947年に卒業し、すでに収容所を引きはらってロサンゼルスに自宅を構えていた両親のもとに帰った。

次男のシゲルは別にアメリカに対する忠誠心は強くなく、軍に志願はしなかったが、1944年に徴兵され、ミネソタ州フォート・スネリングの陸軍日本語学校で日本兵捕虜を尋問する訓練を受けた。卒業後は太平洋戦線に送り出され、捕虜を尋問する特別諜報部隊 (Military Intelligence Service) に所属することになっていたが、幸い日本語学校を卒業する前に戦争が終結し、太平洋戦線への出動は見送られた。

VI. 戦後

養子にいったジョージこと小嶋正治は、「終戦」により日本陸軍より除隊になり帰還したが、学校には復帰せず、転々と進駐軍の仕事をした。四男の海野学は海軍兵学校から除隊になり、いまの大阪商科大学に入った。

五男の海野春夫は、軍需工場の閉鎖と同時に、中学校に戻り、正規の勉強を再開し、翌年旧制の高等学校に入学したが、そのときにはすでに叔父との関係を勘案し、アメリカに帰る準備を始めていた。友人からは、大学に行くチャンスを蹴ってアメリカに行く馬鹿者といわれた。事実当時は高等学校を出れば大学入学は、ほとんど保障されて

いた。

1945年、敗戦後間もなくアメリカから航空便が届いた。それはアメリカで陸軍日本語学校にいた次男シゲルからの手紙で、進駐軍として和歌山に駐屯している、兄弟三人に会いたいから中之島の堂島橋の北の袂で待つようにという手紙だった。その日、指定の場に待機していると、アメリカ陸軍の軍服を着た二世が橋の南端から歩いてきた。これが兄との十年ぶりの再会になった。だがその「兄」は春夫にとっては十年間文通も何もなく、記憶にもほとんど残っていない、名前だけの兄だった。社会的な、また心理的な意味合いをもたない、生物学的な意味のみの「兄」だった。GIの制服を着た日系人がそこに立っているだけのこと、感激は全くなかった。

シゲルの任務は少佐付き通訳だった。二人はジープで和歌山の奥地に日本陸軍の残したトンネル内の弾薬などの軍備品を探す仕事だった。奇しくもそのトンネルは春夫たちが戦争中に掘ったものだった。しかし当時はそのことは知らず、後年になって二人が語りあってわかったことだった。

兄、シゲルとの再会が社会、心理的に空洞化したものであったのと同様の体験を、春夫は翌年アメリカに帰って母親に11年目に会った時にも体験した。それは子供が慕う「母親」というよりも、ある日系一世の女性が目の前で「私はあなたの母親です」と宣言をしている、それに対して春夫は、一体どう反応していいかわからないというのが事実だったように記憶している。母親の方にしては母親としての母性愛があり、また11年まえ日本に置いてきた罪悪感もあったに違いない。だが、春夫の方からはそれに反応するものが皆無だった。

学の母は学がアメリカに帰れるようにいろいろ尽力した。戦争中に敵国の軍隊に入っていたので、おそらく彼の市民権は自然消滅か、事実剥奪されただろうとの憶測があり、アメリカの国籍が取り戻せるか疑問だった。学の母親が神戸総領事館に宛てて書いた手紙の下書きが残っている。何回も書き直した三枚か四枚ぐらいの下書きには母親として可愛い息子をどうにかしてアメリカに帰りたいという心情が汲み取れる、面々と書き綴った手紙である。学が海軍兵学校に入学したときは

もちろん、終戦になったときもやはり未成年だった、ということを経験してアメリカ国籍の返還を嘆願している涙ぐましい手紙である。(じつは学はアメリカ時間の1945年8月14日、日本時間の15日に18才になったので、終戦の時点で彼が未成年だったか、成年に達したかは法の解釈の微妙なところだろう。)ともあれ、学の母の議論が通じたのか、学はアメリカの国籍を回復することができた。そして春夫がアメリカに帰った翌年に学も帰った。

学は帰国後大学に入り、大学院へと進んだ。朝鮮戦争が始まり徴兵制度がしかれると、学は徴兵され陸軍言語学校で中国語を学び、卒業後は皮肉にも台湾でなく日本へ送られた。学は奇しくも日本とアメリカ両国の軍隊に属したことになる。

ジョージ(正治)もアメリカへの帰国を決心し、パスポートを取得する準備を始めた。ジョージは養子に行き、戸籍上の法的な名前を「ジョージ・ウンノ」から「小嶋正治」に変えてしまっていたので、この二者が同一人物であることを先ず証明することから始めなければならなかった。また、ジョージの入籍、つまり日本国籍の取得が無効であると論じた。同時に彼は日本の軍隊に入っていたし、すでに18歳以上だったので、学の場合のように未成年で兵役に服したという議論は出来なかった。正治は日本の政府を相手取り、アメリカの国籍にある者を、(日本の国籍をもっていたのだが)日本の軍隊が徴兵するのは違法であるという、学と同様きわどい理由で訴訟を起こし、認められてアメリカの国籍を回復した。彼の場合、帰国するには養父、小嶋光三の了解も必要であり、またその時点で彼は結婚もし、一子をもうけていたので妻方との折衝もあったので時間がかかり、帰国したのは1957年だった。

VII. 結語

(1) 現在では「太平洋戦争」ないし「第二次世界大戦」と呼ばれているが、当時の正式な表現では「大東亜戦争」だった。あえて「大東亜戦争」、「支那事変」などの表現をここで使うのは、当時の侵略的イデオロギーを復活させるためでは当然ない。戦時中の表現を使うことによって当時

の心理的雰囲気をわずかながらでも再現させ、当事者が巻き込まれていたコンテクストを読者に主観的に感じていただきたいからである。小学生で、後に国民学校の生徒であった春夫ならぬ、「小嶋秋夫」が徐々に戦争の真っ只中に巻き込まれていく。と同時に秋夫の世代は学校教育、新聞、ラジオなどのメディアを通して愛国心、軍国主義を内面化していくことになる。これを戦後のマスター・ナラティヴでは「上から押しつける」、「洗脳する」という表現で批判することになるが、幼時から愛国・軍国主義、また「鬼畜米英」のスローガンで教育を受けたことは、アメリカ人が幼時から民主主義に「洗脳」されるのと何ら変わりはない。「押し付け」、「洗脳」などの表現は戦時中のマスター・ナラティヴを戦後のマスター・ナラティヴで批判していることになる。

(2) 1945年8月15日(日本時間)に日本は敗戦を迎えたのだが、それは「終戦」という中性の用語でごまかされ、敗戦の真の意味を日本政府は隠そう、あるいはなるべく和らげようとした。そのナラティヴはいまだに引き継がれ、「終戦」は死語になってはいない。ということはいまだに日本人は戦争に負けたことを素直に受け入れがたい事実として把握しているといえよう。

(3) 三男のジョージならぬ海野正治と四男の小嶋学はアメリカの国籍を所持しながら大日本帝国の軍人になった事実をどう捉えるべきか。事実、敵国人が日本の軍隊に入っていたということになる。学は「自分がアメリカの国籍をもっているということは、日本の海軍も当然知っていたはずだが、それに対して何らかの質問もなければ疑問もたず受け入れられた」といっている。敵性を自国の軍人にするということをマスター・ナラティヴの立場からどう解釈すべきだろうか。

(4) マスター・ナラティヴの立場からいえば、日本国籍のみをもつ、大和民族である狭義の日本人のみが大日本帝国の軍人になり、日本民族の長たるべき天皇陛下を死をもって守ることになっている。しかし当時の軍人には朝鮮民族や台湾先住民もいたという事実はあまり知られていない。後者は広義の「日本人」と定義し、大日本帝国の軍人になったことを戦時中のマスター・ナラティヴではどう扱えばいいのだろうか。修正されたマス

ター・ナラティヴは「大東亜共栄圏」を唱え、大東亜諸民族は兄弟であるとし、天皇をその長に置くことになるが、その「大家族」の中で「支那事変」という戦争が1937年から長期にわたって続くという説得性のないイデオロギーだった。

(5) 小嶋正治(ジョージ)は徴兵を避けるため師範学校に入ったのだが、戦況の悪化とともに師範学校の徴兵免除は取り消され、いやおうなしに徴兵されることになる。ジョージのように天皇に忠誠ではない、天皇のために命を投げ出したくない日本人も随分いたのではないだろうか。ジョージは二世だから、アメリカ生まれだから、アメリカの国籍があるから徴兵を避けたのではなく、死にたくないから師範学校に行っただけのことだった。また、春夫が「海軍経理学校に志願中」という虚偽の名目で陸軍への志願を回避したのも、天皇陛下のためであっても死にたくない「非国民的」思想の結果だった。そういう面でも、「天皇陛下のためには死も辞さない」というマスター・ナラティヴと、個人のモチベーションとの間には随分食い違いがあるのではないか。

(6) 春夫が「海軍経理学校に志願中」という虚偽の名目で陸軍への志願を回避した、と現在の時点で公にいえるのは戦時体制を徹底的に批判する現時点での政治的環境(マスター・ナラティヴ)があるからこそである。むしろそのような発言は「政治的に適切」で、「胸を張って」いえることになっている。敗戦前の日本ではそのようなことは公表できなかった。

(7) 海野兄弟の母にとって、終戦になり収容所生活が終わったのは、ある面からすれば残念だった。三年間の「長期休暇」が終わってしまったのだ。そこには憲法違反を錦の御旗に掲げ、日系人の西海岸撤退・収容所での監禁の非を唱えるマスター・ナラティヴと、個人の体験との食い違いがある。

(8) 日系人の活動家は、戦時中の日系人強制収容の「非」を強調するために、政府の公用語としての relocation camp という表現をあえて否定し、ナチ・ドイツがユダヤ人を収容した concentration camp という表現を使っている。しかし日系人の relocation camp とユダヤ人が収容された concentration camp とには雲泥の差が

あり、この両者を同一視するのは憚られる。

(9) 海野一家の戦前からの行動をマスター・ナラティヴと照合した場合三つのタイプが見られる。

①マスター・ナラティヴと重複する行動。たとえば「天皇陛下万歳」を叫び、「教育勅語」を暗記し、愛国心、軍国主義を素直に受け入れていくのはマスター・ナラティヴを地でいくといつてよからう。

②マスター・ナラティヴと矛盾する行動。兵役を逃れるために師範学校に行ったり、海軍経理学校への志願という嘘をついて陸軍への志願を回避する。

③マスター・ナラティヴと無関係の行動、事件。ジョージと春夫が小嶋光三宅に預けられ、叔父、叔母を「父」「母」と呼ぶようにいわれたことはマスター・ナラティヴとは一応関係はない。マスター・ナラティヴと関係はなくても、個人のレベルでは決定的な事件が起こっている。つまり、マスター・ナラティヴはあまたの個人史の集大成ではなく、個人史の特定的一面のみを取りあげているのに過ぎない。当然個人史なくしてはマスター・ナラティヴは語れない。パーソナル・ナラティヴなくしては歴史はない。

(10) 春夫は戦争中に日本で育ち、教育を幼稚園から受け、「洗脳的」な愛国心を植え付けられ、天皇崇拜を信じ、「鬼畜米英」を疑わない、

忠誠な（法的にはどうであれ）日本国民になっていた。だが、敗戦後は全く反対のことが通説——マスター・ナラティヴ——になった。「神格天皇」は「人間天皇」に格下げになった。「鬼畜」だった米英は最高の国家、文明となり尊敬、願望的となった。崇高なる「大東亜戦争」を推進させたイデオロギーは根底から覆され、このイデオロギーを絶対としてきた日本政府は今や全く反対のイデオロギー、民主主義を掲げて臆しない。政治体制のその身勝手さに春夫はやりきれないものを感じた。

日本の当時の民主主義は付け焼刃にすぎなかった。それを信じようが信じまいが日常生活には支障をきたさなかった。ところが春夫は民主主義が深く根ざし、絶対不可疑のイデオロギーで、毎日の生活に「民主主義」が唱えられるアメリカに帰ってきた。その「民主主義」は価値体系としては戦時中の「天皇崇拜」と等価のものであると春夫は認識した。「天皇崇拜」が廃棄できるイデオロギーである以上、「民主主義」も同様に廃棄に値するイデオロギーに違いない、というのが春夫の結論だった。政治に対する絶対的な不信は、その時に根強く植え付けられ、その不信は今もある。二つの相矛盾する政治のシステムを目の前に押し付けられ、その信奉を強いられ、結局どちらも信用できない、という結論に春夫は達したのである。

Life Divided by War: Memory and Record

ABSTRACT

The paper will interrogate the relationship between the master narrative of the Pacific war and events of the individuals who found themselves in the war, and questions the adequacy of the master narrative in accounting for individual events. The paper will closely examine how one Japanese American family was divided by the Pacific War on either side of the ocean, resulting in unanticipated consequences, such as different members of this family serving on the armed forces of either country. Several different kinds of relationship between the master narrative and the individual are identified in the conclusion. For one, two brothers served in the Japanese military while holding US citizenship. How are we to comprehend this fact of accepting members of an enemy nation? For the U.S., these brothers were “enemy combatants” while holding U.S. citizenship. But the U.S. government never made any issue of this fact. In the end this paper argues that the master narrative of the war itself is inadequate to account for the events and actions of each individual involved in the war. The master narrative has its own ideologically driven agenda, and facts of war are edited accordingly. Events and actions of individuals are incorporated into the master narrative only to the extent they support it.

Key Words: war, master narrative, Japanese American